

実施報告：MULC NOVEMBER FORUM 2010

「e-Learning 活用、基礎力活用型中国語教育プラン“游”——自律型教育構築への試み」

講師：湯山 トミ子 先生 （成蹊大学法学部教授）

開催日時：平成22年11月17日（水） 17:00 - 18:30

会場： 神田外語大学4号館2階 4-201 IT レクチャールーム1

本フォーラムでは、中国語 e-learning プログラム「游」の開発者である、成蹊大学法学部教授湯山トミ子先生をお招きし、「游」の開発経緯、プログラムの内容・構成、授業での活用方法、及び、「游」利用による学習効果についてお話いただいた。その概要は以下のとおりである。

1. 「游」開発までの経緯について

まず、教員向けに、授業中に声調パターンを提示する目的で、中国語声調データベースを開発。これには、約10万語の語彙、30万語の音声データを収録。その後、このデータベースを(中国語再履修)学生にも利用してもらうため CD-ROM 版の発音練習教材を作成。後に、これを Web ベース化する（現在も「游」サイト内にて利用可能）。この教材が「游」のベースとなる。

2. 「游」の内容・構成

2. 1. 「中国語の発音（基礎編）」

声調と文字（簡体字とピンイン）とを結びつけるのは、中国語を習い始めた学生にはかなりの困難が伴う。そのため、声調学習とピンイン学習とは、別のアプローチをとる。

声調学習では、声調を2つの方法で視覚化する。まず、声調イメージを学習者に植え付け、その後、発音の波形を表示させることによって、モデルの発音が実際どのような波形を示すのか、学習者がパソコンに接続したマイクに向かって発音した際、モデルの波形と自分のとの間にどのような差異あるのかを、確認することができる。また、声調の組み合わせの（複雑な）パターンをマスターさせるため、声調練習は、単純な音節 **ma** を用いる。

一方、ピンイン学習の最初の段階では声調を付けずに学習させ、これをマスターした段階で、声調を付け加えピンインの発音練習を行う。そして、これを単音節から多音節へと展開させる。なお、単音節に関しては、中国語に存在する全ての声調とピンインの組み合わせパターンを網羅している。

2. 2. 中国語初級テキスト WEB 版「学ぼう！中国語 発音と語法の基礎」

本教材は、発音と文字・語法とを一致させることを目的とする。そのため、まず、導入として発音編において発音に関する詳細な解説を行う。次に、20 課からなる構文編において発音・イントネーション学習から文法解説へという手順を踏む。

イントネーション学習においては、短音節から、その音節を用いたフレーズ、さらに、そのフレーズを用いた短文・長文へと肉付けする形で、構文の発音を覚えさせるように序列化させる。なお、各課の構文は簡体字、ピンイン、声調（のイメージ）が、それぞれ、表示・非表示を選択でき、また、波形表示も可能であることから、発音練習、和文中訳、中文和訳など、様々な使用方法を提供する。

文法解説は、各 4 課終了後に設けてある「まとめ」において行う。ここでは作文練習も合わせて行わせることも可能。

2. 3. 語彙学習教材「マルチメディアピクチャーディクショナリー」

語彙学習を通じて学生に新しい発見を促させるため、絵や仕掛けなどで遊び心を持たせ、学生が楽しく学習できる練習教材。他の教材同様、声調をベースに、波形を表示させながら発音を学ばせる。また、登場した語彙を用いた会話練習のセッションも設ける。

2. 4. 「学習プログラム 力をつけよう」

上記三教材の応用編として、各種演習問題を提供。この教材では、各タスクの成績や進捗状況などの学習管理も行う。

3. 「游」の授業での利用方法

3. 1. 発音練習

まず、各学習者に、CALL 教室で「游」の発音編を 15 分程度、集中的に、学習させる。（教員はその間、練習状況を注視し、必要に応じて適切なアドバイスを与える。）引き続き、フロア練習で、発音ごとに模範発音をさせる学生をランダムに 1 名選び、その学生の発音に続き、残りの学生が同じ発音を繰り返すという練習形式をとる。その際、学生間（模範発音と繰り返しの発音の間など）で、発音の矯正を行わせ、教員は積極的な模範発音・発音指導・矯正等を行わない。（その代わり、教員は、学生が惰性的な発音練習をしていないか机間巡視し、また、学生がアドバイスを必要としていると思われる場合にのみ、気づきを与える程度で忠告を行う。）

この作業を **ma** のような一音節のものからスタートし、短母音・複合母音（その後、プラス四声）、フレーズ・文へと展開させる。

3. 2. 文法学習

状況設定のみを与え、まず、構文の発音練習を徹底的に行う。構文の発音は、短いものからスタートし、徐々に、語彙を付け加え、フレーズ・短文・長い構文へと展開させる。そして、それをマスターしたうえで、最後に教師が文法的知識を与え、体系化を図る。

4. 「游」の活用による学習効果

4. 1. 発音学習

下記3点について、湯山先生より報告があった。

1. 学生が、発音練習するのをためらわなくなる。
2. 学生は、声調・ピンインのマスターが早い段階で可能。(6月にはクラスの9割以上は四声をマスターし、全員がお互いの間違いを矯正できるレベルに達する。)
3. フレーズ・文の発音練習の際、繰り返し間違える場合は、一度、**ma**で声調を矯正してから、そのフレーズ・文の発音に戻るという方法をとる。これにより、発音学習での個人差が少なく高いレベルで平均化されている。

4. 2. 文法・構文学習

知識伝達の文法学習では、教員側が文法項目を体系的に整理して伝達しようとは試みるが、なかなか、学習者側が、それを体系的に捕らえられない。「游」の文法学習は、自律型で、とりわけ、発音練習を十分な時間行い、そして、最後に教師が文法の解説を加え、体系化することで、学生の文法力の高いレベルでの平均化(80%台の正答率が圧倒的に多くなる)が可能となったとの報告があった。

5. 所感

湯山先生と共同開発者の武田紀子成蹊大学元理工学部助手のほぼ二人だけで、「游」の膨大、かつ、念入りのシステムを開発されたことには、大変なご苦勞があったであろうことを容易に推し量ることができたが、一方で、かなりこだわりを持った形で作られたことに、多大なる情熱を注いで作られていることも感じ取られた。

また、「游」の授業での活用は、英語学習で近年取り入れられている **Blended Learning Method** そのものではあるが、これを初習中国語のクラスに取り入れ、かつ、高い学習効果を上げていることに驚きがあった。

最後に、今後の「游」の運用や発展に関しては、所属される成蹊大学の事情などかなりの難問があるとの報告もあり、また、湯山先生ご自身が他大学の中国語の授業で「游」を活用することも望んでおられることから、今回のようなフォーラムを再度開催し、広く、周知させる必要があることも感じた。